自然を愛する心をもって　【自然愛護　D（19）】

林　豊洲

「日高の山々に囲まれた狩勝峠から十勝平野を見たまえ。この森林と平野、森と湖、山と川を豊かにたたえる帯広こそ、北方文化創造の基地となる重要な地だ。」

帯広に本社を置く新聞社の創業社長であり十勝の自然を*こよなく愛した、林豊洲。彼は、十勝に生きる人々のために力をつくし、四十六年の短い生涯をかけぬけました。

【林　豊洲の写真】

豊洲は、明治二十二年（一八八九年）、大分県臼杵市に生まれました。本名を板井茂といいます。

一九〇八年、十九歳になった茂は、地元の名家、林家と*養子縁組し、長女・波津女と結婚したことで、名を林茂と名乗るようになりました。

波津女の父・長次郎が、帯広に単身赴任し、家具店を開いていたこともあり、茂は妻の波津女とともに帯広へ移住し、家具屋として働くようになりました。

茂は、しばらくの間、家具屋として商売を続けていましたが、「商品販売の仕事は、性に合わない。まだ開拓半ばである十勝の開発に身を投じることこそ、自分の使命ではないか。」と考えるようになります。

一九一四年、茂は、「十勝日日新聞」社長、菅野光民と出会います。光民は、十勝開発に対する独自の考えを掲載し、多くの読者の賛同を集めていました。

もともと「話すこと」や「書くこと」が好きだった茂は、光民の考えや新聞の魅力にすっかりとりこまれ、「自分が打ち込める仕事はこれしかない」と長次郎を説得し、家具屋をやめて、二十六歳で「十勝日日新聞」に入社を果たしました。

ある日、光民は茂にこんな話をしました。

「十勝開発の最後の決め手はトムラウシだ！十勝の発展のためには、どうしても開発が必要なんだ！近く、現地調査に行こうと思う。また留守にするが、会社をたのむぞ。」

「トムラウシか・・・。おれは、何も反対するわけじゃない。ただ、それよりも先に手をつけなければならな

い土地が、山のようにあると思うんだ・・・。」
茂は、光民の開発を進めようとする思いを理解していましたが、十勝の発展は、観光にあると固く信じるようになっていました。景色のよい土地を探し、それを宣伝して観光客を招くことで、十勝の美しい自然を守り豊かにする、というのが茂の考えでした。
このころの日本は、住民生活の向上のため、土地の開拓を進めることが中心となり、茂のように、「観光業」に目を向ける人はほとんどいませんでした。
一九一八年、茂のもとに、＊訃報が届きます。調査に行った光民が、熊におそわれ命を落としたというのです。それを聞いた茂は、涙を流しながら
「おれが、お前の 志 を継いでやる！十勝開発のために命を落としたお前のために！」
と、光民の代わりに十勝の発展を進めることを誓うのでした。
こうして、茂は、光民の代わりに三十歳の若さで「十勝日日新聞」の経営に携わるようになり、「十勝毎日新聞社」と会社の名前を変え、社長に就任しました。また、このころから、茂は自分の名を「豊洲」と名乗るようになります。

社長就任からしばらく経ったある日、豊洲は、会社の仲間とともに、然別湖へカモ猟に出かけました。「ああ、あそこにカモが。」と、仲間が湖の岸を指さしましたが、豊洲は、猟銃を手にとろうとはしませんでした。
豊洲の目に映っていたのは、カモではなく、蒼く透き通って光る水面と、白樺の幹の白さを交えた、えぞ松やとど松の山なみの美しさだったのです。紺碧の水を蓄えた然別湖から、広大な十勝大平原がゆるやかにうねり、果てしなく広がる大地と、宝石のように輝く湖。
「十勝広しと言えども、これほどの秘境は他にはない！広く世の人たちに知らせよう！」
然別湖周辺の美しさにすっかり魅了された豊洲は、この場所を北海道の大観光地にすべく、国から国立公園の指定を受けるための運動を始めたのです。
当時、国から国立公園の指定を受けることは、日本を代表する自然の風景地であることを認められると同時に、指定された地域を保護し、観光名所として多くの観光客を呼び込むことが期待できるものでした。
まず、豊洲は、十勝毎日新聞の紙面に、然別湖の素晴

らしさを書きつづりました。「秘境・然別湖を、絶対に国立公園に指定させる！」という思いから、国立公園審査委員の田村剛博士を現地に呼び、然別湖の美しさを、自分の目で確かめてもらいました。

豊洲とともに然別湖の岸辺に立った田村博士は、

「うーむ、なるほど・・・、これは聞きしに勝る眺め！まさに天下一の眺めです！」

田村博士の言葉を聞いた豊洲は、

「その通りです。あの折り重なって積まれた岩の間に生えているのが、ガンコウラン・オンコ・シャクナゲの高山植物ですよ。」

と、まるで自分の庭を自まんするように話しました。

また、大阪と東京の新聞社が全国的に*日本新八景の募集を行うと、他の新聞社にもかかわらず、十勝を売り出す絶好の機会として、狩勝峠から見る十勝平野の景色を投票するよう、新聞で市民に呼びかけたのです。

豊洲は、「十勝の開発」と「美しい自然」を共存させるという険しい道を選び、長い間、活動を続けました。

それからしばらくして、豊洲の美しいものへの愛情と、それを守ろうとする努力が身を結び、狩勝峠は「日本新八景」に選ばれ、一九三四年には、然別湖と糠平、トムラウシを含めた二十三万ヘクタールの土地が、大雪山国立公園に指定されたのです。

「ああ、なんて美しい景色なんだ。」

国立公園指定から八十年以上が経った今も、然別湖と十勝平野の美しい眺めは、大雪山国立公園を訪れた観光客に、おしみなく感嘆の声を上げさせるのでした。

【然別湖　顕彰碑の写真】

*こよなく・・・この上なく

*養子縁組・・・血のつながりとは無関係に親子関係を成立させること

*訃報・・・人が亡くなったことをいち早く連絡すること

*日本新八景・・・日本を代表する八つの景勝地

◎　なぜ、豊洲は観光業に力を入れたいと考えたのでしょうか。

◆　あなたの身の回りで、自然を守る活動を見たことがありますか。